



「エコレクトG066」を紹介する(右から)櫻井宏 J A 岐阜中央会代表理事会長、柴橋正直市長、西村寿文 J A 全農岐阜県本部長＝岐阜市役所

下水汚泥活用の新肥料

J A 全農 岐阜など 地域資源で価格抑制

全国農業協同組合連合会 県本部 (J A 全農岐阜、岐阜市宇佐南) などは、岐阜市の下水汚泥焼却灰から回収したリン酸を使った肥料「エコレクトG066」を開発した。ロシアによるウクライナ侵攻などの影響で肥料原料が高騰する中、原料の一つであるリン酸を国内の未利用資源で賄うことで、コストの低減や資源の地域循環を進める。今月中に県内 J A グループの資材店舗で販売を始める。

エコレクトG066は、市が製造する回収リン酸を使った肥料「岐阜の大地」を活用し、J A 全農岐阜と肥料メーカーの協同肥料 (名古屋市) が開発した。回収リン酸のほか、国産の鶏ふん燃焼灰も活用し、化学肥料の使用割合を約15%低減したのが特徴。岐阜の大地に、窒素やカリウムなどの肥料成分をバランス良く配合し、家庭菜園など幅広い場面で使いやすとした。

価格は15キロ入りで2200円程度で、同様の成分の化学肥料よりも5%ほど抑えた。初年度は3千袋の販売を目指す。

ほとんどを輸入に頼る肥料原料が高騰する中、原料の安定供給や化学肥料の使用量を減らすため、下水汚泥や家畜のふんといった国内資源の活用に注目が集まっている。岐阜市は下水汚泥からのリン酸の回収に2010年から取り組んでおり、年間約140トを生産。現在は J A 全農岐阜を含め4社に販売している。今回、連携して、地域資源を活用した農業生産資材の開発に取り組んだ。

12日に岐阜市役所で発表した J A 全農岐阜の西村寿文県本部長は「持続可能な循環的な農業で意義のある取り組み」と語り、J A 岐阜中央会の櫻井宏代表理事会長は「県内 J A グループ全体で販売していきたい」、柴橋正直市長は「循環型社会の進展に貢献できるありがたい仕組み」と述べた。(小田香緒里)